

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾ニュース

人間としての生き方を考える道德教育と同和教育② ～資料「ナイン」について語り合う道德授業～

資料とした短編小説「ナイン」とは

井上ひさし自身が、1966年頃に下宿していた東京都新宿区のJR四谷駅前にある「新道通り」に存在した少年野球のチーム、新道少年野球団の物語、内容は以下の通りです。

(1966年頃)新宿区の少年野球大会の決勝戦で、新道少年野球団のベンチは、日差しで焼け付くような暑さだった。

1人で2試合投げ抜き、ベンチに帰り、ぐったりしている投手の英夫の前に、主将の正太郎が立って日陰をつくり、他の選手たちも毎回、陰のないところに陰をつくった。そして、その試合を戦い続けていた。

それから18年後、正太郎が、英夫などから寸借詐欺や盗みをし、仲間を裏切っていく。しかし、英夫たちは、正太郎を訴えるどころか、新道少年野球団の主将として、ナインの固い絆の中心だった正太郎への感謝と信頼を失うことがない。

ナインが暮らした現在の「新道通り」

当時の新道には豆腐屋があり、ガラス店が、お惣菜屋が、ビリヤード屋が、そして主人が会社勤めの普通の家があった。たいていの日用品は新道のなかにある店屋で十分に間に合っており、それらの店屋はまた新道に住む人たちだけを相手にして、とにかく暮らしが立っていた。新道は、ささやかにではあるが、しっかりと自給自足しており、そこで小路全体に自信のようなものがみなぎっていた。



延長戦を戦った現在の外濠公園野球場

当時は、野球場はまだ金網で囲われてはおらず、外堀通りから土手を下りて球場に立つことができた。土手には桜の木が植えてあったが、この土手が一塁側とネット裏スタンドになった。

つまり三塁側のチームはいつも陽に灼かれていなければならないが、一塁側のチームは少なくとも自軍の攻撃中は桜の土手のつくる日陰の下で汗をふくことができる。あの夏の1日、準決勝も決勝も、三塁側に陣取った新道少年野球団はきっと死ぬほど辛かったろう。



騙されたにもかかわらず、正太郎を許し感謝さえする英夫を通して、固い絆で結ばれた登場人物について語り合う道德授業、主題を「生きる絆」としました。

板野中学校3年B組の生徒たちは、登場人物に寄せる思いをひたむきに語り合っていきます。この資料には、同和問題や人権問題に関わる内容はありますが、学年全体で、同和問題を「わがこと」として語り合ってきた生徒たちは、同和問題の学習を通して培ってきた「絆」について語り合っていきます。